

静岡県立大学短期大学部
特別研究報告書(14年度) - 65

がんの子どもをもつ母親の成長要因と看護の役割についての検討

金城やす子 小島洋子 片川智子

**Consideration with regard to the role of the nursing for the mother
who has the child with cancer and factor of mother's growth**

KINJO, Yasuko KOJIMA, Youko KARAKAWA, Satoko

はじめに

がんの子どもをもつ母親は、子どもの闘病を経験することにより、より前向きな行動がとれるようになる。その母親の変容(母親の成長)に影響する要因として、病気をもつ子どもの存在や、夫・病児の同胞など家族の支援があることが明らかとされた(平成13年度特別研究報告書参照)。また、母親は子どもが入院前の生活が維持できることを望み、学校に対する強い思いも抱いていた。母親は、インタビューの中で、看護師の存在について語ることも多かった。看護師の行動や言動に対して母親は「入院しているから言いたいこともいえない」とか「看護師にもいろいろな人がいるから」などと看護師のかかわりを批判する発言や「もっと話しを聴いてほしかった」などの要望もみられた。母親が子どもを通して受けた看護をどのように体験していたのか、看護に何を期待していたのかを明らかにすることは、母親への援助に重要と考え研究に取り組んだ。

本研究では、母親が体験した看護や看護師について分析することにより、今後の家族、特に母親に対する看護と看護師の役割について検討することを目的とする。

研究方法

1) 研究対象

『がんの子どもをもつ親の会』の会員で研究の目的に同意の得られた母親 8 名。
 (対象の選定についての詳細は、平成 13 年度特別研究報告書参照)
 インタビュー後に 3 名の母親に対し追加でのインタビューをお願いし、データの補足
 (不明な内容の確認)を行った。

2) 倫理的配慮

研究目的について書面にて説明、テープに録音すること、インタビュー中においても中
 断することは可能であること、データは研究以外に使用しないこと、プライバシーの保護
 について配慮することを文書および口頭で説明し了解を得た。

3) 研究方法

半構成面接法

半構成面接により語りの内容をテープに録音し、その後すべての内容を逐語録に起こ
 し、一つの意味単位をカード化しデータとした。カードを類似した体験ごとにまとめ、
 母親の看護・看護師への見方(態度)という視点から考察した。

「親の会」会報による母親の意見のまとめ

血液腫瘍の子どもをもつ親の会(月 1 回の定例会)に出席後、定例会での内容をまと
 めた会報“ほほえみ”から、母親の看護師に対する意見を参考に考察した。

4) 研究期間

平成 12 年 12 月～平成 15 年 3 月

インタビューによる調査期間：平成 13 年 6 月～平成 14 年 10 月

「親の会」参加期間：平成 12 年 8 月～平成 15 年 3 月(現在まで継続参加)

結果および考察

インタビューによる看護と看護師像に関するデータは 108 件、全データの 12%であった。
 類似するデータをカード化し、類似性でまとめた。その結果、36 のサブカテゴリー、8
 カテゴリー、4 コアカテゴリーが抽出された。

表 1 母親の体験した看護と看護師像

サブカテゴリー	カテゴリー	コアカテゴリー
母親を気遣い見守ってくれた	母親を気遣い・見 守り・希望を育む 看護	看護師に対する好 意的な見方
元気になるとい気持ちで関わってくれた		
子どもの具合が悪い時、勤務外でも残ってくれた		
母親同士と一緒に過ごせる場を作ってくれた	母親の安心感を 育む看護	
再入院時、知っている看護師がいて安心できた		
いつでも普通に話を聞く場をもってくれた		

子どもとよく遊んでくれた		
看護師が子どもをかわいがってくれたり、本を読んでもくれた		
夜中に何回も着替えさせてくれ、よくやってくれた		
一生懸命よくしてくれた	母親を支える看護	
大丈夫という気持ちになり、入院が苦痛じゃなかった		
親の気持ちを理解してくれた看護師の支えが大きかった		
お母さん看護師の存在が大きかった		
看護師には言いたいことがいえないし、相談しにくい	信頼できない看護師	看護師に対する非好意的な見方
看護師はどこまでわかっているのか心配		
親がいないとき、看護師は何をしているのか心配		
看護師の言動に不信や不満を持った		
看護師の仕事に対して疑問をもった		
母親の思いを汲み取ってほしい	母親の希望する看護	看護（師）に対する認識
病気の進行に伴って適切なアドバイスをしてほしい		
その人にあつたことを考えてほしい		
もっとわかりやすい話し方をしてほしい		
もっと話ができる場を作ってほしい		
看護師が殻を破ってくれと突っ込んだ話ができるのに		
経験を生かして看護師自身の考えを話してほしい		
気立てがよく、愛想が良い看護師になってほしい		
不愉快な思いをさせないでほしい		
母親が感情をぶつける人	母親が思う看護師	
思いを上手に表現できる人もいれば、できない人もいる		
思いがあればいい看護師になれる		
看護師の立場や気持ちがわかったような気がする	母親の意識の変化	
看護師によって子どもの見方が変わった		
あんな看護師にはなりたくない	子どもは看護師をよく見ている	その他（子どもの看護師に対する認識）
先輩に怒鳴られた看護師はかわいそう		
先生に叱られていた。私が先に気が付けばよかった		
あの看護師は遊んでくれる人		

（１）看護師への好意的な見方

体験した看護の類似性でまとめると、看護師が母親のことを気にかけている様子や、そっと肩を抱きしめて「がんばってね」と声掛けした様子などから「母親を気遣い、見守ってくれた」「元気になるという気持ちで関わってくれた」「子どもの具合が悪い時に勤務外でも残ってくれた」「母親同士がいっしょに過ごせる場を作ってくれた」などのサブカテゴリーが抽出され、さらに『母親を気遣い・見守り・希望を育む看護』というカテゴリーが抽出された。また、「再入院時、知っている看護師がいて安心した」「子どもとよく遊んでくれた」「いつでも普通に話しを聞く場をもってくれた」「看護師が子どもをかわいがって

くれたり、本を読んでくれた」「夜中に何回も着替えさせてくれ、よくやってくれた」などから『母親の安心感を育む看護』が、「一生懸命よくしてくれた」「大丈夫という気持ちになり、入院が苦痛じゃなかった」「親の気持ちを理解してくれた看護師の支えが大きかった」「お母さん看護師の存在が大きかった」などのサブカテゴリーから『母親を支える看護』とカテゴリー化し、母親は看護師のさまざまな気づかいによって子どもの闘病に前向きになれたことが明らかになった。このことから、“看護師への好意的な見方”という母親の感情的態度が概念化された。

母親と看護師が良好な関係を維持できることは、子どもの看護において重要なことである。突然の発病による混乱と環境の変化は、子どもだけではなく、母親の精神的な不安にもつながる。母親の不安は子どもの不安につながり、病棟環境への不適応を起こしかねない。看護師は、母親のおかれた状況に共感的な態度をもち、ともに子どもの看護に向き合う姿勢を持つことが大切である。看護師の共感的な態度は母親の安心感につながり、子どもの病気を受け入れ、積極的な闘病の姿勢へと向かわせることになる。

(2) 看護師への非好意的な見方

「看護師に言いたいことが言えない、相談しにくい」「看護師はどこまでわかっているのか心配」「親がいないとき看護師は何をしているのか心配」「看護師の言動に不信や不満をもった」「看護師の仕事に対し疑問を持った」などから看護師に不安や不信を感じ『信頼できない看護師』というカテゴリーが抽出され、“看護師への非好意的な見方”という態度が概念化された。

看護師に対する不信や不満は、親の会でも話されることが多く「面会にいてもシーツが汚れていたり、ベッド上が乱雑になっていると子どもが放って置かれたように感じてしまう」「看護師が暗い顔をしているとわが子に何かあったのではないかと心配になる」などの意見があった。また、「看護師さんに病状について聞こうと思ってもなかなか声がかけれない。看護師さんから一言声をかけてもらえれば話しやすいのに」と感じている母親も多い。“わからないことは聞いてくれればいいのに”という看護師の態度は母親に拒否的なイメージを与えることが多く、「わからないことは何でもいいですから聞いてくださいね」という声かけが、母親の安心感につながるようである。母親を配慮したことばの使用やことば掛けが、特に病初期の母親の不安を軽減させることにもなる。

母親も看護の対象として関わることは重要であることは理解できるが、母親の要求を汲み取り、対応していくことは難しい。一人一人の母親の不安な気持ちやどうしようもない怒りを受け止め、母親の思いを尊重した対応は、子どもの看護と同様大切なことである。そのためにもお互いが話し合える場を持つこと、看護師からの積極的な働きかけが必要となる。母親が安心して子どもの看護に携わることができるような援助を、チーム全体で考え、実践していくことが要求されているのではないだろうか。

(3) 看護(師)に対する認識

「母親の思いを汲み取ってほしい」「病気の進行に伴って適切なアドバイスをしてほしい」「もっとわかりやすい話し方をしてほしい」「もっと話ができる場を作ってほしい」「経験を生かしてもっと看護師自身の考えを話してほしい」「不愉快な思いをさせないでほし

い」「気立てがよく、愛想がよい看護師でいてほしい」などのサブカテゴリから『母親の希望する看護』、また「母親が感情をぶつける人」「思いを上手に表現できる人もいれば、できない人もいる」ということから『母親が思う看護師』というカテゴリが抽出され、そして「看護師の立場や気持ちが変わったような気がする」「看護師によって子どもの見方が変わったような気がする」から『母親の意識の変化』というカテゴリが抽出され、“看護（師）に対する認識”という態度が概念化された。

母親が看護師に何を求めているのか、母親は看護師をどのように見ているのかがこのカテゴリからうかがい知ることができる。看護師としてもつ高度な専門的知識を求めただけではなく、母親の相談役であったり、愚痴のはけ口であったり、医師との連携の要であったり、とその時々看護師に対し求められるものが違うことから、柔軟な対応が要求されていることがわかる。

面会時に「今日ご飯をたくさん食べましたよ」という看護師のことばが母親を安心させたり、看護師の笑顔が母親を笑顔にさせ、子どもの安心感につながることも多い。母親は「入院中は不安で先生や看護師さんの顔を常にうかがっている。看護師さんが笑顔で挨拶してくれると、それだけで安心です。」と話された。人間関係における基本的なことを母親は教えているように感じる。専門職として知識の向上を図る一方、人間関係を基本とした援助技術の向上も常に心がけることが重要であろう。

（４）その他（子どもの看護師に対する認識）

母親は子どもが看護師や看護をどのように見ていたのかについても語っており、看護師と医師との関係、看護師同士の関係、また看護業務の一つ一つを子どもが観察し、評価していたことを述べていた。「あの看護師は遊んでくれる」「先輩に怒鳴られた看護師はかわいそう」「私が先に気がつけばよかった」などという子どもの言動から「子どもは看護師をよく見ている」とカテゴリ化され、“その他（子どもの看護師に対する認識）”として概念化された。

まとめ

母親の体験した看護には、母親にとって良いと感じた関わりと不満や不信につながる良くないイメージでとらえたものがあり、さまざまな体験が母親の看護師像に影響していることが明らかにされた。また、母親は看護師に対して個別の評価をすることもあり、子どもが信頼する看護師に母親としてもよい評価を与えていた。特に新人看護師の一生懸命な姿に「がんばっていい看護師さんになってほしいですね」と評価し、看護の技術が未熟であることに不満を持つことも少なかった。愛想がよく、気立てがいいこと、常に子どものそばにいる看護師は相手に不愉快な思いをさせないことが大切、などと看護師の人間性を評価する発言も聞かれた。

さらに、期待する看護については、＜気持ちを汲み取ってほしい＞＜もっと話し合える場をつくってほしい＞＜わかりやすい話し方をしてほしい＞＜その人にあった適切なアドバイスをしてほしい＞などであった。これらの結果から、母親の期待に応える看護師の関わり方が母親の体験をより前向きにすることに大きく影響するということが示唆された。

母親が安心して子どもの闘病に向き合えるためには、母親の期待する看護が展開される

ように、一人一人の母親のおかれている状況を判断し、援助につなげていくことが大切である。

おわりに

インタビューと親の会を通して、母親が看護師をどのように見ているのかを検討し、母親の期待する看護、小児看護のあり方について検討した。今回は異なる3施設の入院経験者からのデータであること、また8事例ということ、親の会会報からの意見であることなどの制約から、小児がんの病児をもつ母親の経験した看護師（像）として一般化することはできない。さらに、今回の研究においてはインタビュー内容をデータ化する段階での信頼性、カテゴリー化における妥当性などについては不十分であると感じており、さらに検討を重ね精密度を高めていきたい。

カテゴリー化はKJ法の手法を使用し、看護師像については看護師に対する母親の見方“態度”として捉え、態度成分（感情、認識、行動）の枠組みで検討した。

今後は母親の成長に影響を及ぼす要因としての看護の関わりについての因子探索研究、その関連要因に関する研究として継続発展させていきたい。

研究に御協力いただきましたお母さま方、「親の会」の皆様の御協力に深謝いたします。

参考文献

- 1) 牛尾禮子：重症心身障害児をもつ母親の人的成長過程についての研究；小児保健研究第57巻第1号 P63～70 1998
- 2) 岡道哲雄・浅川明子：病児の心理と看護；中央法規出版 2001
- 3) 尾身康博・伊藤哲司：心理学におけるフィールド研究の現場；北大路書房 2001
- 4) 柏木恵子、若松素子：「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み：発達心理学研究第5巻第1号 P72～83 1994
- 5) オムクレイグヒル滋子：母親たちの変化と成長；戦いの軌跡 P196～218 1999
- 6) 野口美和子：ナースのための質的研究；医学書院 2000
- 7) 橋本やよい：母親面接における母親の語りについて；母親の心理療法 P33～98 2000

(平成15年3月19日受理)